

泉州方言に見られる二つの文言音

Two Literary Strata in the Chuan-chow Dialect

村上之伸

1.はじめに

樋口氏は1993年、閩南語の文言音について「文言音は本来文言文を誦する際の個々の漢字の読音であるから、原則として1種類の読音をもつのみである。したがって、もし別の新しい読音が文言音として移入されることがあれば、かつて文言音であったものでも、みずからの白話音の地位に落ちなければならないことがある。」と述べている。

本稿ではこの例として泉州方言の「果開一／果合一／効開一」を挙げる。そしていつ頃どの辺りからどのような形で借用したのかという点について文献資料をもとに考察してみたいと思う。

2.泉州方言の文献資料

本題に入る前にまずここで用いる泉州方言の三つの資料について述べておきたい。最も古いものとして『拍掌知音』（以下知音とする）がある。これは17世紀後期に作られた韻図で、文言音のみが記載されている⁽¹⁾。これから百年以上後の1800年に作られたのが『彙音妙悟』（以下妙悟とする）である⁽²⁾。これは文言音と白話音が共に記載されている韻書である。そして現代の泉州方言は『泉州市方言志』（以下方言志とする）を参考とする。

2. 1泉州方言の「果開一（歌韻）／果合一（戈韻）／効開一（豪韻）」

泉州方言の「果開一／果合一／効開一」にはそれぞれ二種類の白話層がある。一つはこの三韻を区別する対応〈対応A〉である。

〈対応A〉果開一≠果合一≠効開一（白話音）

	妙悟	方言志		妙悟	方言志		妙悟	方言志
拖	ct'ua	ct'ua	破	p'ua ^o	p'ua ^o	袍	p'au ^o	p'au ^o
舵	ctua	ctua	磨	ɛbua	ɛbua	草	^c ts'au	^c ts'au
我	^c gua	^c gua	螺	ɛlə	ɛlə	蚤	^c tsau	^c tsau
柯	ckua	ckua	火	^c hə	^c hə	薙	ck'au	ck'au
		果開一		果合一		効開一		
方言志		ua		ua/ə ⁽³⁾		au		
妙悟		ua		ua/ə		au		

もう一つの白話音はこの三韻が同じ読み方をする対応〈対応B〉である。妙悟のこの韻（刀韻）には「此一音俱従土解」という割注が加えられている。

〈対応B〉果開一＝果合一＝効開一（白話音）

	羅	哥	波	妥	科	報	道	高
方言志	ɛlo	cko	c'p'o	t'o ^o	ck'o	po ^o	^c to	cko
妙悟	ɛlo	cko	c'p'o	t'o ^o	ck'o	po ^o	^c to	cko

文言音は一種類でこの三韻が同じ形になる対応Bである。但し文献によって音価が異なり、方言志、妙悟では-ɔ、知音では-oとなる。

〈対応B〉果開一＝果合一＝効開一（文言音）

	多	歌	破	坐	和	保	道	告
方言志	ctɔ	ckɔ	p'ɔ ^o	^c tsɔ	ɛhɔ	^c pɔ	^c tɔ	kɔ ^o
妙悟	ctɔ	ckɔ	p'ɔ ^o	^c tsɔ	ɛhɔ	^c pɔ	^c tɔ	kɔ ^o
知音	cto	cko	p'o ^o	^c tso	ɛho	^c po	^c to	ko ^o

文献資料の記載をもとにまとめたものが次のaであるが、知音の文言音が他の白話音と同じ-oなのだから、当然このままでは整然としない。そこでbのように整理して、知音の文言音が本来の文言音でそこに新しい文言音が入って来たと考えたい。すなわち本来これらの韻にはそれぞれを区別する白話層（対応A）と区別しない文言層-o（対応B）しかなかった。そ

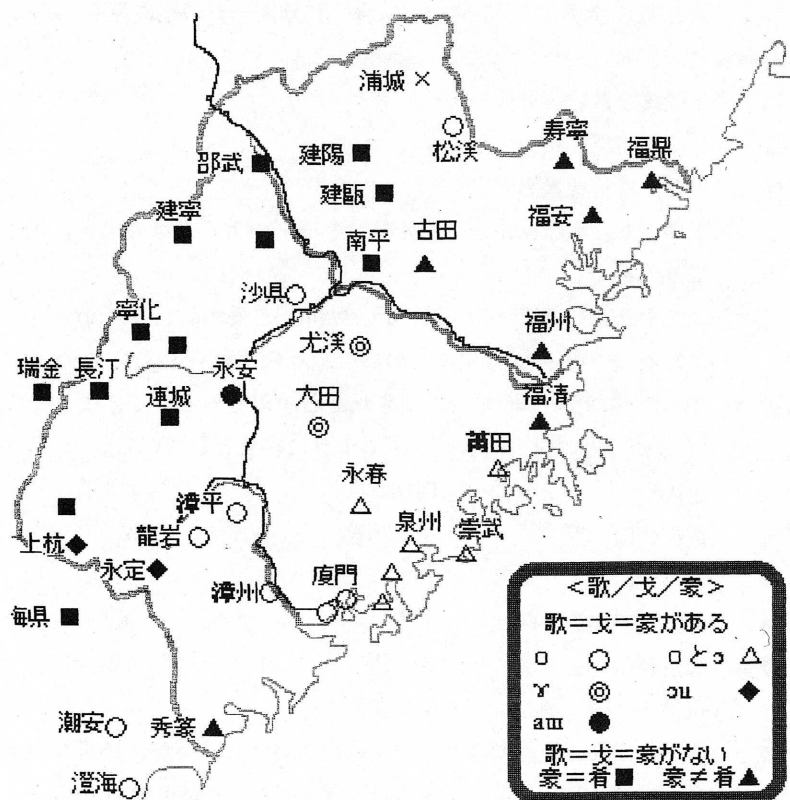
の後16世紀後期から17世紀末までの間に新しい文言音-ɔ (対応B) を取り入れたため、そこで今までの文言層が白話層に降格してしまったのである。

a.	『知音』	『妙悟』	『方言志』
文言音	B (-o)	B (-ɔ)	B (-ɔ)
白話音		B (-o)	B (-o)
白話音		A	A
b.	『知音』	『妙悟』	『方言志』
文言音		B (-ɔ)	B (-ɔ)
白話音	B (-o)	B (-o)	B (-o)
白話音		A	A

2. 2福建省内の分布

このような出方をするのは泉州のみにとどまらない。地図上に△で示した水頭(南安)、永春(城内)、蓮河(同安)、崇武(惠安)、莆田(城内)といった泉州の周辺でも同じ現れ方をするのである。ではこれらの新しい文言音-ɔはどこから来たのであろうか。福建省で「果開一／果合一／効開一」が等しくなる地点は閩江より北の沿岸部に限られてはいるが、そうであるからといって直ちにそのような地点から新しい文言音を借用したと決めることはできない。例えば漳州などの出方は泉州の本来の文言音と同等の-oという音価であるため泉州がこの韻を借用したとは考えにくいし、また上杭などの-ɔu は音価こそ似てはいるが、効撮が一二等(豪肴韻)を区別しないという他の閩西客家と同様の特徴を備えていることから、なぜその時に効撮二等字が借用されなかった理由を説明できない。

	保(豪)	飽(肴)	草(豪)	炒(肴)	高(豪)	交(肴)
上杭	^c pɔu	^c pɔu	^c ts'ɔu	^c ts'ɔu	^c kɔu	^c kɔu
寧化	^c pau	^c pau	^c ts'au	^c ts'au	^c kau	^c kau
泉州(文)	^c pɔ	^c pau	^c ts'ɔ	^c ts'au	^c kɔ	^c kau



そこで閩東の出方に注目したい。なぜなら福州などにも泉州における新しい文言音と同じ音価-ɔ̃が「果開一／果合一／効開一」の字に見られるからである⁽⁴⁾。

果開一／多駝羅左做歌荷可河

果合一／婆波破惰螺妥鎖坐

効開一／保報刀桃勞曹操高考豪

勿論以下のように実際は果合一が牙喉音と一部の舌音声母の場合に限って異なる読み方をする。

火^cxuõ、禍xuõ²、果^ckuõ、窩^cxuõ、臥^cuõ²、妥^ctuõ²、朶^ctuõ

しかしこの-uõという韻も泉州などの△の地点には存在しないため、最も近い韻である-ɔ̃に代えて同様に借用されたと考えることができよう⁽⁵⁾。

福州の-uõと泉州音との対応関係は以下のように整然としている。

声母	中古音	例字	泉州音
唇音	遇撮合口一等	布普補墓	-ɔ̃
舌音	果撮合口一等（文言）	妥朶裸	-ɔ̃
齒音	遇撮合口三等（白話）	朱主注	-u ⁽⁶⁾
牙喉音	果撮合口一等（文言）	科和火	-ɔ̃
	遇撮合口一三等	芋句誤	-ɔ̃

まとめると泉州等の地点では本来閩南の出方-oであったが、16世紀後期から17世紀末までの間に地理的隣接していた福州など閩東地方から文言音-ɔ̃と-uõを新しい文言音-ɔ̃として借用したということになる。

2. 3用いる字音と語彙の関係

「果開一／果合一／効開一」において一つの文言音と一つの白話音しか存在しなかった知音の時代に新しい文言音が入って来て、音韻的には三つの層になった。しかしそれは妙悟以降それぞれの字が三種類の読み方を持つようになったことを意味してはいない。ここでは新しい文言音が入って来たことによって、各字音がどのように変化したのかを考察してみたい。まず妙悟にみられる字音を下のように三つに分けてみる⁽⁷⁾。

果效攝（果開一／果合一／效開一）

（-ɔ韻）鵠播簸鄱袍坡頗多禱濤陀佗他惰導稻盜叨滔拖唾裸咾勞撈牢醜
籬螺槽左早坐座操糙躁瑣糕戈果裹柯課靠豪禾禍號阿窩奧

（-o韻）萄采搔個何賀

（-ɔ韻&-o韻）波褒婆寶保堡玻報刀逃馱倒埭道到桃討妥套羅羅腦遭槽曹棗
造草騷梭鎖唆燥躁高羔膏歌哥稿告過科可犒河和好荷蠟襖

-ɔという新しい文言音のみ持っている字が約57%も占めている。しかしこれはこれらの字が知音の時代にはまだ存在しなかったということではない。知音が韻図という形式をとっている為、これら全ての字の所属を明らかにすることはできないが、妙悟で-ɔという読み方しかない字で、知音に記載されている「果課多頗破滔早坐窩禍號」の11字は全て-oとなっているのである。このことから文言音が新しく入って来た時に本来の文言音の中の約半分は-o>-ɔという変化を起こし、残りの半分の字は重層したと考えることができる。

では一体どんな字が変化を起こし、どんな字が重層したのだろうか。もう一度妙悟の字に注目してみると、両者には常用字かどうかという差異があることが分かる。すなわち文言音の中にも常用されるものとそうでないものがあり、前者は重層し、後者は変化したのである。重層した方は元々白話に相当する読み方がない、常用字がほとんどである。例えば刀（ナイフ）、道（～士）、羅（姓）、曹（姓）、嫂（阿～：兄嫁）、高（姓）、蠟（～仔：牡蛎）、科（～挙）というように。一方、-o>-ɔという変化を起こした方は非常用字で、例えば「蒔く、坂、多い、稲、裸、左、彼、巢」などの語彙には上述した漢字「播、坡、多、稻、裸、左、他、窩」を形態素として用いずに、それぞれ「□^cia、隣^ckia、□^ctsue、□^ctiu^o、褪徹徹t^hɔ^o t'e^o t'e^o、倒手□^cto^o t's'iu^o c^opuī、伊^ci、岫^csiu^o」といった全く別の語で表現するし、また「破れる、巻き貝、早い、座る、果物」という語彙にもそれぞれ「破、螺、早、坐、果」の白話音、すなわち「破p'ua^o、螺clə、早^ctsa、坐^ctsə、果^ckə」を用いるのである。

これが更に約二百年後の現代泉州音では以下のようにになる。

果效攝（果開一／果合一／效開一）

(-ɔ韻) 袍播鄱頗破多濤到導稻盜滔唾裸勞撈曹早操戈果裏過稿靠禾豪禍窩

(-o韻) 波玻褒婆寶保鵝報簸坡駝桃宋埭惰馱叨他它討妥套羅鑼醪螺啞腦糟
造坐座臊唆梭鎖瑣媧哥個河荷賀阿蠟襖奧

(-ɔ韻&-o韻) 保刀逃萄陀佻倒道拖牢遭槽棗左草挫糙騷搔燥躁掃高羔糕
膏歌稿告科柯課可和何好號

ここで注目すべきは-oという読み方しかない字が全体の約42%（48字）を占めていることである。下の表は妙悟と方言志に共通する115字の内訳を示したものであるが、これで明らかなように、妙悟で本来これらのうちの19字が-ɔと読まれ、26字が-ɔ/-oという二つの読み方を持っていた。

『妙悟』

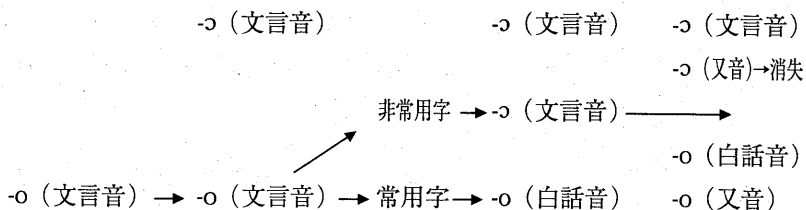
	-ɔ	-o	-ɔ/-o		
『方言志』	-ɔ	25	0	4	29
	-o	19	3	26	48
	-ɔ/-o	13	3	22	38
		57	6	52	

前者は-ɔから-oへ変化したというもので、説明しにくいのが、音韻変化とは別に個別的にはこのような変化もあったと思う。例えば、最近における廈門音-oの影響⁽⁸⁾や同じ諧声符を持つ字からの類推⁽⁹⁾が原因として考えられないだろうか。後者は二読のうち一方の読み方が淘汰されたことによるものである。前述したように、-oの方が本来、文言音に属していたとはいえ、常用されていたので、一方が淘汰される場合、そのほとんどが-oになるのも納得できよう。更に「拖草掃歌告科何」という二読する字に対して、『方言志』には「又音」（文白異読以外で、一つの字に二読以上あることを示す）という記載があることにも注意したい。これはこれらの字から文白という層の観念が消えたことを示しているにほかならない。すでに-oという読み方だけになった26字もこのような中間段階を経て生まれた

ものと思われる。

3. まとめ

新しい文言音が借用されてからの変化過程を簡単にまとめてみると以下のようなになる。



関東から新しい文言音が借用され、本来の文言音から非常用字が $o > \omega$ という変化を起し、そこで残った常用字が白話音(妙悟で言う所の土解)に降格した。その後文白という観念が希薄となった幾つかの字については、前述の「又音」となり、更に一方の ω が消失するという変化をおこしたのである。

4. 終わりに

本稿では文言音に新しい文言音が重なる場合、内部でどのような変化が起こるのかを泉州方言を例として論じた。本来文言文を読む為のものである文言音に借用という現象が行われたのは文言音が白話音とは違う正統な音であるということを明白にする必要があったからであろう。もしかすると借用当時「果開一／果合一／効開一」の o はその一部の字が常用され白話音のようなふるまいをしていたために、文言音でありながら正統感が薄れかかっていたのかもしれない。

〈注〉

(1) 古屋(1993年)を参照。

(2) 『拍掌知音』と『彙音妙悟』の音価は樋口氏(1985年)に拠る。

- (3) əは唇音以外の声母の時に出る。
- (4) 北大中文系(1989年)によれば陰去、陽去、陰入調ではつがっとして若干低くなるようである。また最近の資料、例えば李如龍等(1994年)ではつを-oとし、陰去、陽去、陰入調でつとなるとしている。
- (5) 勿論つは「果開一／果合一／効開一」字が借用される以前に泉州方言に存在していた。遇撮合口一等字などがこの韻で読まれる。
- (6) 北大中文系(1989年) p.39. によれば福州の老年層、中年層はこれらを-uəではなく、-yəと読むという。
- (7) 妙悟と方言志に共通する百十五字について調べた。
- (8) 閩南地方で用いられる聖書(一般的に文言音が用いられる)には全て廈門音でローマ字表記されていることなどが一つの原因として挙げられる。
- (9) 例えば「叨、瑣、籬」などはそれぞれ「刀、鎖、羅」の類推によってoとなったと思われる。

〈参考文献〉

- 北京大学中文系 1989.『漢語方音字彙第二版』文字改革出版社
- 樋口靖 1985.「『十五音』と『台湾十五音』-台湾語研究のために」『筑波中国文化論叢5』 p.1-11.
- 樋口靖 1993.「閩南語効撮一等字の文白異読について」『文教大学文学部紀要7』 p.54-69.
- 黄典誠 1953.「從閩南的“白話字”看出拼音文字的優點」『中国語文-7』
- 黄澹川 1831.『增補彙音妙悟』(『閩南語經典辭書彙編(1)泉州方言韻書三種』洪惟仁編, 1993)
- 古屋昭弘 1993.「關於《拍掌知音》的成書時間問題」『開篇』 vol.11 p.10-111.
- 李如龍等 1994.『福州方言詞典』福建人民出版社
- 廖綸璣『拍掌知音』(『閩南語經典辭書彙編(1)泉州方言韻書三種』洪惟

仁編, 1993)

林連通 1993.『泉州市方言志』社会科学文献出版社、北京

〈地図作成に用いた資料〉

秋谷裕幸 1993.「閩北松溪方言同音字表」『開篇』vol.11 p.51-67.

陳章太・李如龍 1991.『閩語研究』語文出版社

鄧曉華 1988.「閩西客話韻母的音韻特点及其演變」『語言研究-1』

李如龍・張雙慶 1992.『客贛方言調查報告』廈門大学出版社

林寒生 1987.「壽寧方言的語音特点」『廈門大學學報-2』p.75-97.

林連通・陳章太 1989.『永春方言志』語文出版社

馬重奇 1993.「漳州方言同音字彙」『方言-3』

馮愛珍 1993.『福清方言研究』社会科学文献出版社

王天昌 1969.『福州語音研究』

張振興 1992.『漳平方言研究』中国社会科学出版社

本稿は大塚漢文学会大会（平成7年6月）における口頭発表を加筆、訂正したものである。発表の際、多くの先生から有益な御意見を頂いた。此処に記して感謝したい。